

みみんみん

【題字】谷川俊太郎さん



せんだい・みやぎNPOセンターニュースレター“みみんみん”は、あらゆる組織が社会課題解決をキーワードに出会うきっかけづくりと、活動を発信することから、新しい風を起こしていきたいと願っています。



—カルビーニコニコこども基金—

2012年度からカルビー株式会社様が、石巻地域の子どもに関する支援として拠出された助成金は2015年まで15団体18事業。たくさんの子供の笑顔と地域の元気が生まれました。

目 次

- | | |
|------------------------------------|---|
| P 2…… 代表理事挨拶 — 代表理事 大滝精一 — | P 3…… 「支えてきた場所を支え続けるために
—東日本大震災からの5年—」 — 事務局長 伊藤浩子 — |
| P 4～6 せんだい・みやぎNPOセンター実施事業のご紹介 | P 7…… ライブラリレー 認定特定非営利活動法人 地星社 |
| P 8…… 新規会員・継続会員、ご寄附、編集後記、お知らせ、連絡先等 | |

せんだい・みやぎNPOセンターの再出発にさいして

代表理事 大滝 精一

この1年余りにわたり、みやぎ連携復興センター（れんぶく）の分離・独立をめぐり、会員ならびに関係者の皆様にたいして、多大なご心配やご迷惑をおかけしたことにつきまして、心よりお詫び申し上げます。2月末にはこれまでの混乱の責任をとつて、3名の幹部役員が辞任するとともに、新たに土佐・青木両理事が常務理事に就任し、新体制のもとでせんだい・みやぎNPOセンター（せ・み）は、再出発することとなりました。れんぶく独立の件についても、会員の皆様にお十分な説明が尽くされていない点があるかと存じます。この点については、さらに明確でわかりやすい説明に努力するとともに、失われたせ・みにたいする信頼を、1日も早く回復することに邁進する所存です。どうか改めまして宜しくお願ひ申し上げます。

せ・みは、2017年に設立20周年を迎えます。再出発にあたり大切なことは、もう1度せ・みが成し遂げてきたことを振り返り、原点を確認することです。これまでせ・みの行ってきた仕事は、全国あるいは東北に先駆けて、新たな課題を発見し、必要であれば他の団体や組織と連携もしながら、その課題を解決していくための仕組みを提案し、それを実証実験し、地域や社会にそのモデルを広めていくことの連続でした。この仕事は、役員だけでなく現場の職員にとっても、本当に「ワクワクする仕事」だったと思います。そうした心躍るワクワク感が、震災の前から少しづつ失われかけ、NPO支援、施設管理、助成金配分などの枠の中で、決まりきった仕事をするスタイルへと矮小化していかなかったでしょうか。もしせ・みに原点があるとすれば、それは現場にある社会や地域の課題に真正面から向き合い、それを解決できる、他の団体も模倣したくなるような新しい仕組みとモデルを次々に発信し続けていくことにあると思います。

もちろん課題もその解決の方法も時代とともに変化していきます。せ・みがこれまで開拓してきた仕組みを忠実に守り、それを動かしていくことに汲々とするのではなく、もっと民間としての自由度や発想のイマジネーションを許容するような、そんな仕事やプロジェクトに取り組める場に、せ・みを変えていかねばなりません。先日仙台サポセンがこの1年行ってきた調査事業の報告を聞く機会がありましたが、その場でも1)新たな日の当たりにくい課題をどう発見していくのか、2)その課題解決を、他団体とも協力しながらどう担っていくのか、3)課題解決のための試行錯誤、実験、実践をどう仕掛けていくのかが、重要な話題となっていました。課題の性格や現在のせ・みの陣容を考えれば、これから活動をせ・み単独で行うのではなく、当事者を巻き込み、せ・みにない専門性やスキルをもつ団体と連携しながら、「自

ら考え行動する市民」をふやしていくことが、せ・みの目指すべき次の方向性だと考えています。

せ・みの再出発にとつてもうひとつ大切な点は、内部のガバナンスと管理体制の構築です。今回の問題では、この面での脆弱さが露呈することになってしまい、中間支援組織としての信頼を大きく損なうことになりました。理事全員がガバナンスについて、さらに認識を深めるとともに、個人のカリスマ性やパーソナリティに頼らない規程や手続の整備をきちんと進めていく必要があります。認定NPOの取得は、そうした体制整備にとつても非常に重要であり、メンバー全員が一丸となって取り組んいくべき課題と認識しています。

しかし、このことは、職員の皆さんに型にはまつた仕事を強要することとは違います。せ・みの目指す方向を共有しながら、職員からもさまざまな意見や提案が出され、自らが新しいキャリアを切り開いていけるような闊達な組織にせ・みを変えていきましょう。本部と2つのサポセンの間で、もっとヒトと情報が行き交う、そんなせ・みを目指したいものです。

常務理事 挨拶

常務理事 土佐昭一郎

このたび、常務理事に就任いたしました（特活）ミヤギユースセンター代表をしております土佐昭一郎です。創設者の加藤哲夫氏からはミヤギユースセンター設立以来多大なるご指導を頂き、現在もその教えを大切に活動しております。常務理事の就任にあたり、せんだい・みやぎNPOセンターが現場目線でみな様と共に歩むお手伝いをしたいと考えております。今後ともご支援ご指導の程、よろしくお願い申し上げます。

常務理事 青木ユカリ

昨年11月の臨時総会において理事に就任し、その後3月の理事会にて常務理事に選任されました。同時期に就任された土佐さんと二人三脚で務めて参りますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

当センターは1997年に立ち上がり、来年大きな節目を迎えます。役員、スタッフ一同力を合わせて前に進んで参りたいと思います。

「支えてきた場所を支え続けるために—東日本大震災からの5年—」

事務局長 伊藤 浩子

2016年4月14日(火)、熊本県熊本地方、大分地方に大きな地震がありました。5年前に起きた東日本大震災とは違う災害状況ですが大規模な災害映像から当時の状況が蘇ります。これまでの5年、中間支援組織としての役割は何だったのか、振り返りました。

<2011年度>

●Mission Statement (2011.9月総会にて変更)

—社会課題解決に必要な市民力を高めることを通して復興を加速させ、市民参加・協働型の社会を仙台・宮城の地で実現することを目指す。—

東日本大震災の年、復興支援に必要な直接支援、コーディネート、他組織との連携、情報交換の他、緊急的に緊急的に被災地の団体の活動に必要な資金として「はばたけ!みやぎNPO復興活動応援基金(以下はばたけファンド)」を立ち上げ、2014年度まで計35団体に総額1070万円を助成しました。加えて被災地にとっての必要な仕組みとして、復興に特化した事業を行う「みやぎ連携復興センター」、外部からの支援のお金の受け皿となり、地域のお金の循環を生み出す機能となる「地域創造基金みやぎ」を立ち上げ、より多様な支援ができるような機能を創出しました。

また、被災地で活動するNPOでの長期インターンを支援し、次世代を創る若者を育成する「東日本再生ユース・チャレンジプログラムーインターンシップ奨励プログラム」が始まり、現地協力団体として2011年~2014年まで継続し33名の学生インターンとNPOをつないでいます。

震災後、NPO/NGO、企業などが被災地に様々な支援を考え、その受け入れや連携するための検討や取り組みを行い、機能を構築した年でした。

<2012年度>

復興に特化するみやぎ連携復興センターでは、①連携促進事業、②人材育成事業(復興応援隊サポート) ③調査事業として、宮城県域で復興支援に取り組む地域や団体、自治体等との連携を行い、2015年7月1日をもって法人化を致しました。

資金提供としては石巻の子供支援を行うカルビーニコニコこども基金事務局を担い、2015年3月までに15団体18事業へ総額490万円の助成を行いました。資金助成のプログラムが精査されていく中、ヒアリングに来られる企業や組織に被災地の状況を伝え、必要な支援を伝えてきました。

2011年から新しい公共支援事業の交付金が始まり、それを活用して「NPOセクターの社会的信用をより高めるための情報発信基盤整備事業」、「新寄付税制と資金調達の理解促進事業」を行い、12年度は宮城県内3地域で「情報発信基盤整備事業」を開催し、情報発信の重要性、SNSの活用法など継続的に発信できる機会の提供を行うなど、震災後に設立したNPO向けに基盤整備の取り組みを行いました。

また、CB/SB支援、事業型NPO支援機能「プラスコおおまち」という場の運営と、「プラスコイノベーションスクール」という学ぶ場では10回×3期、11名の起業につながる結果となりました。社会課題をビジネス型で解決する関心度は高く、フォローアップを行いながら、参加者同志もつないでいく役割を果たしました。

震災から1年が経ち、自治体としても「協働によるまちづくり」を意識し直すこととなり、行政職員研修の工夫として、NPOへの活動を体験するプログラムを取り入れ、互いの理解と協働の必要性を体感できる研修の構築ができました。

<2013年度>

13年度は特に市民・NPOの力を高めるための育成や起業支援に注力しました。プラスコイノベーションスクールを8回連続講座として開催、石巻市では「ソーシャルビジネスフォーラム」、「ソーシャルビジネスメッセ」の開催を行いつつ、震災復興起業支援事業として6名の対象者

へ訪問アドバイスを継続的に行いました。

一方、震災後に立ち上がった団体も増加傾向にあり、組織基盤強化の必要性から「今NPOのステップアップに必要な5+1講座」を6講座×県内4地域で開催し、のべ76団体328名が参加致しました。

13年度新たに取り組んだのは、当センター元代表理事である加藤哲夫さんの資料を可視化し、活動者へ提供する事でした。14年度までの2年間で「東日本大震災後のNPO運営支援ワークショップと関連資料のアーカイブ化(以下K-project)」として、資料のデジタルアーカイブ化1500点、WEBサイト作成、目録作成、NPO運営支援イベントの開催を10回行いながら、震災復興活動のフェーズに適応する人材育成につなげています。

<2014年度>

震災後3年間の復興支援を経て、次の5年の運営方針と(1)地域公共人材の育成(2)市民社会の基盤形成(3)セクター間連携の3つのドメインを立て、事業を行いました。

(1)では、プラスコイノベーションスクールは連続講座5回、20名の事例を掲載した冊子作成、2012年以降、合計100名のスクール生を受け入れ復興の担い手の育成となりました。

14年度はあらたに、西松建設まちづくり基金を5年間お預かりし、名取市のまちづくり・人づくりへの取り組みを行っています。

2)特記すべきは、みんみんファンドから拠出した「まち・むすび助成金」の運用です。小さな協働を促進するための助成金として運用し、10団体の協働の取組みの発掘にもつながっています。

またNPO法人組織運営力強化事業に取り組み、仙台市内のNPO法人の運営力向上のセミナー、相談会、スタッフが内部で変わつても業務が遂行できるよう「NPO法人の事務担当者向け お役立ち年間事務局運営スケジュール」を作成しました。

地域では復興の新たな計画策定もそれぞれ取り組む時期となり、亘理町荒浜地区まちづくり計画策定への協力をを行い、まちづくりのための取組みも始めています。

14年度には仙台市で第3回国連防災世界会議が開催され、パブリックフォーラムとして「市民協働と防災テーマ館」を運営し、地域で防災の取組みをしている34団体の活動の発信を行ったことは仙台の「協働」による防災都市を世界へ伝える大きな役割を果たしたと言えます。

3)これまで同様のNPOとコーディネートとなっています。本来は地元企業などと広くつながりを構築していくことが必要であるところが、停滞したままとなり、課題を残しています。

2011年度からの取組みを振り返り、地域状況やそこで取り組む行政、NPO、企業や担い手たちのフェーズの変化に合わせ、NPO支援はもとより、仕組みの構築、人材育成、県内市町の市民活動拠点施設の支援、ワークショップなどを通したまちづくりの支援へと動いてきました。中間支援組織の役割も変化している中、これまでの事業を振り返り、今後の当センターの方向性をしっかりと検討し、使命を具現化することが2015年度と考えております。

しかし組織運営についてのガバナンス、事業分離に伴う混乱や課題を抱え、解決するために一つ一つ検討し整理することにかなりの時間を要しました。会員のみなさまにはご心配をお掛けする状況となつたことに対し、改めてお詫び申し上げます。現在組織運営の見直し、体制の変更、事務局の基盤強化を進めながら、支援から共創へ、原点を大事にしながら新しいせんだい・みやぎNPOセンターの役割の構築を進めて参ります。

実施事業の紹介

宮城県震災復興 担い手NPO等支援事業

平成27年度宮城県の震災復興担い手NPO等支援事業を受託し、復興を担うNPO等を対象とした組織基盤強化とネットワーク促進のためのセミナー、ワークショップ、ラウンドテーブルの開催と、復興に係るネットワークについてのアンケート調査を実施しました。

セミナー、ワークショップ、ラウンドテーブルについては3月号すでに報告済みですので、今回は2月に実施したアンケート調査の結果について報告します。

当センターのNPO情報ライブラリー登録団体や、当センターとお付き合いのある、行政、企業の皆さん、宮城県内に事務所を有するNPO法人などに郵送でのアンケート調査にご協力いただき、195件の回答を得ました。アンケートは、事業実施地域、組織形態、地域の復興への関わり方、復興を担うべき組織などについて選択式および記述式としました。

事業を実施している地域から「宮城県全域」「沿岸部」「内陸部」「仙台市」の4つに分類し、その回答を比較したところ、地域の特色を表す傾向が見えてきました。

例えば、「現在、地域の復興に関わっているか」という問い合わせ、「地域において今度どのような役割を担うか」という問い合わせについて、事業実施地域で比較してみると、津波被害が甚大だった沿岸部で事業を実施している組織では、現在も今後も「被災者支援に関わっている」との回答が50%を超えたのに対し、内陸部では20%を下回っています。

また、地域に多くの組織がある仙台市では、それぞれ得意分野に特化して役割を担っているため、回答が分散し、全体に回答の割合が低くなりました。一方で、沿岸部では、「被災者支援に関わっている」との回答の他、「まちづくりに関わっている」「地域で社会貢献活動・課題解決行動を行っている」との回答も50%を超えており、少数の組織が、被災者支援・まちづくり・課題解決といった複数の役割を担っていることが伺えます。

「地域の復興には、どんな人たちが関わっていると良いか」と問い合わせの回答について、回答者のセクター別に見てみると、営利組織からの回答では「NPO法人」「ボランティア」が最多となり、NPOセクターへの期待が垣間見える結果となりました。

アンケート調査および、ワークショップ・ラウンドテーブルの参加者の声から見えてきた様々な結果については、「復興の担い手の今とこれから」と題した報告書で紹介しています。ぜひ、お手に取ってご覧ください。

(太田貴)

「東北6県NPO調査事業」

せんだい・みやぎNPOセンター編(2005)『NPOが社会を変えられない5つの理由』において、「調べられない」ことが「NPOが社会を変えられない」理由の1つとして挙げられています。震災から5年を経て、被災三県と呼ばれる岩手県、宮城県、福島県ではそれぞれNPO法人の設立件数が増加しています。この被災三県のNPO法人を対象とした調査研究はこれまでに多くなされてきました。一方で、東北六県を一つの地域として包括的に震災後のNPO法人をとらえる試みはいまだに十分ではありません。

当センターでは、内閣府および東北各県の所轄庁にまとめられている事業報告書を基に、会計に関する調査を行っています。現在、各県の経常収益、経常支出について入力の作業を進めており、この調査結果は、公益財団法人世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会の助成を受け、冊子を発行する予定です。

ここでは、山形県のNPO法人の経常収益について、中央値(速報値)を例示します。山形県において対象となるのは、2016年9月時点において、事業計画書の提出が確認された361団体です。NPO会計基準に例示されている勘定科目で整理すると、正会員受取会費65000円、賛助会員受取会費0円、入会金0円、受取会費0円、受取助成金0円、受取補助金0円、事業収益3,025,928円、雑収益125円です。この他に、団体独自で設けた勘定科目は43ありました。また、事業報告書のページ数の中央値は、6ページです。

さて、この数字を見て、「自分たちの団体はどうしていけばいいか」、「新しく団体を設立する時にどう使うか」イメージができるでしょうか。数字を押さえることで客観性は高まるかもしれません。しかし、それぞれの団体が抱える課題やこれからの展望を考える際に、調査結果が求められるとすれば、見せ方にも工夫が必要です。

『NPOが社会を変えられない5つの理由』では、「調べられない」に続いて、「形にできない」、「伝えられない」ことが「NPOが社会を変えられない」理由として挙げられています。東北6県NPO調査では、分析結果を数字だけではなく、アクションにつなげやすい形にして、伝えていくことを心がけて、結果をまとめていきます。

(高橋結・大野加奈恵)

2015年度カルビーニコニコこども基金 助成事業報告

2012年度から継続している、「カルビーニコニコこども基金」。この助成金は、石巻地域の子供たちを支援するための事業を応援するもので、2015年度は3団体に助成致しました。

■ステップアップコース(50万円)

一般社団法人BIGUP石巻

「被災地の街に彩と活力を増やす活動わんぱくプロジェクト」

NPO法人にじいろクレヨン

「宮城県の被災児童と全国の支援者を絵本の絆で結ぶプロジェクト」

■立ち上り期応援コース(20万円)

未来の希望プロジェクト奥松島

「子どもたちのアートの力プロジェクト」

この基金は震災から5年目という節目において今年度で終了することとなりました。4年間でこの基金から15団体18事業に助成し、被災地の子供たちの笑顔を取り戻す楽しいイベントづくりやコミュニティを作る場づくり、中高生が未来のチカラを育むプログラムの開催のほか、石巻で子供を支援する団体の連携した取り組みなど更に発展させる応援もできました。助成元であるカルビー様の助成金だけではない支援としては担当者、社員の方々も現地に足を運び、ボランティアで一緒に汗を流し協力してくださいましたことも被災地にとっては大きな励みとなりました。この場を借りて感謝申し上げます。

当センターは今後もこの助成金プログラムをきっかけに継続している取り組みや団体を応援してまいります。

(伊藤浩子)

2015年度西松建設まちづくり基金 取り組み報告

2014年度から始まった西松建設まちづくり基金。2015年度は一般社団法人みやぎ連携復興センター、公益財団法人地域創造基金さんばかりとの協働で取り組みを実施しました。

10月14日のキックオフフォーラムに始まり、以下4つのプロジェクトと助成事業を行いました。

1、「名取のまちづくりプロジェクトの作り方講座」

名取市と市民の協働を促すような事業や活動ができるよう、住民主体のまちづくり活動へ繋げていく素地形成をめざし、4回の連続講座を開催しました。

2、「西松建設まちづくり基金に関わる企業CSR研修・交流会」

東日本大震災により壊滅的な打撃を受けた閑上地区。地域再生に向けて日々懸命に活動を続ける名取市の「今」を見るツアーと歴史的に重要な地であった名取市の「昔」も訪ね、地域の未来を改めて考えるきっかけとなりました。

3、「なとり復興塾～名取のまちづくりの未来を担うリーダー育成～」

復興まちづくりが平常時のまちづくりとどのように違い、今後どのような心得が必要なのかを神戸の事例から4回の連続講座で学びました。

4、「美田園北地区におけるサインアートを活用した復興まちづくりプランの策定」

仮設住宅の壁面を飾ってきたサインアートを活用したまちづくりプランの策定に向けて、地域の皆さんからのアイディアや意見をいただき、サインアートの移設を検討しました。

5、「まちづくり助成」

名取市内で取り組まれる「より良いまちづくりとコミュニティの関係や連携を更に強める活動」16団体に、総額250万円の助成を行いました。

以上名取のまちづくりとそれを担う人づくりのため、少しずつアクションを起こしつつある人々を応援してきました。これから2018年度まで市民が自ら取り組みやすいまちとなるよう、継続して進めて参ります。

(伊藤浩子)



実施事業の紹介

仙台市市民活動サポートセンター

■3つの時間より「ちょっと。ボランティア」

2015年度、市民活動がわかる「3つの時間」を実施してきました。NPOのいのちはを「学ぶ」時間。活動者のお話から市民活動を「知る」時間。そして、「体験する」時間として実施した「ちょっと。ボランティア」は、地域や社会のために何かしたいけど、「何からはじめたらよいか分からない」という方に、市民活動やボランティアを体験する機会を提供する企画です。NPO法人アマニ・ヤ・アフリカでは、フェアトレード商品の値札付・包装作業。NPO法人仙台夜まわりグループでは、食事提供支援活動。日本キリスト教海外医療協力会では、使用済み切手の整理作業を各団体の協力を得て実施しました。

年度最後のプログラムが、3月26日(土)に行われました。受入れ団体は、NPO法人おもいでかえる。東日本大震災以降、震災や水害等で被災した写真や思い出の品を洗浄し、持ち主のもとへ返す活動を続けている団体です。当日は、遠くは東京や福岡から参加した5人がスタッフと一緒に、市内若林区にある事務所で被災した写真を洗浄し整理する作業を体験しました。震災から6年目となる今も被災地に関心を持ち続けている人々と活動があることをあらためて知る機会となりました。

詳しくはこちら↓

仙台サポセン ブログ

検索

(仙台市市民活動サポートセンター 葛西淳子)

多賀城市市民活動サポートセンター

■担い手不足解決のヒント

多賀城市では、一つ一つの町内会だけでは解決が難しい課題を、広域で連携し力を合わせて解決をめざす「広域連携の地域づくり」を平成26年度から進めています。地域の方が集まって話し合いながら、地域で大切にしたいこと、改善したいことを明らかにし、必要な取り組みを実践しています。たがさぼは話し合いのプログラム立案やファシリテーター役でお手伝いをしています。

2015年度は4つの町内会が集まり、「子どものために地域ができること」をテーマに話し合いを重ね、子どもから高齢者まで顔見知りになるきっかけとして「昔遊びの会」を実施しました。運営には、これまで町内会に関わったことがない若いお父さん、折り紙が趣味の方、デザインの本業を活かしチラシづくりを引き受ける方、昔遊びの達人として小学校でも活躍する他地区からの助つ人さん、紙芝居サークルの大学生など、さまざまな方が関わりました。

「話し合いの中で特技を知る」「趣味のサークルは人材の宝庫」など、この取り組みから見えてきた人材発掘のポイントを『地域づくりお役立ちガイド～人材編～』としてリーフレットにまとめ、担い手不足に悩む他の地域に役立ててもらえるよう配布します。

詳しくはこちら↓

たがさぼPress

検索

(多賀城市市民活動サポートセンター 中津涼子)

本部事務局より

荒浜地区まちづくり計画策定への取組み

～日本計画行政学会計画賞 特別賞受賞～

亘理町荒浜地区は、東日本大震災で死者151名(町内死者:257名 平成26年現在)という甚大な被害を受けた地域です。地域への帰還率は45%であり、荒浜地区まちづくり協議会では、まちの方向性について計画を通じて住民に伝えなければ、地域から住民がいなくなってしまうという危機感を感じていました。

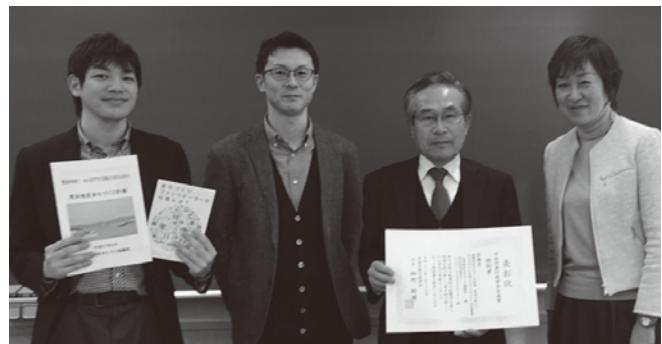
そこで、2014年10月から2015年3月にかけて、まちづくり協議会は地区まちづくり計画策定に向けたワークショップを実施しました。住民主体のまちづくりを目標に、意見の集約し反映させることに腐心して、4月には地区まちづくり計画「荒浜が好きみんなでつくるわたしたちの故郷」が形になりました。

せんだい・みやぎNPOセンターは、このワークショップにおいて、ファシリテーターとしてサポートに入りました。全4回のワークショップに合計7名の職員が参加し、ファシリテーション、意見分類、素案作成における意見分析、計画作成支援を行うことで、ともに計画を作つてまいりました。

2016年2月26日(金)中央大学駿河台記念キャンパスにて行われた日本計画行政学会計画賞公開審査会において、協働による

計画策定のプロセスと震災復興にかける熱意が評価され、亘理町荒浜地区まちづくり協議会とせんだい・みやぎNPOセンターの連名で特別賞を受賞いたしました。

なお、このプロセスについては、『震災復興地区まちづくり読本まちづくりファシリテーターの仕事とは?』という冊子にまとめ、販売しております。これからの住民と創るまちづくりにおけるヒントとなりますので、ぜひご覧ください。



(高橋 結)

活動やニーズ、「志」でつながろう。

ライブラリ



毎号「みやぎNPO情報ライブラリー※」
登録団体の中から、ひとつをご紹介します。

※NPO・市民活動団体の皆さんから活動に関する
情報を預かりして、地域の市民・企業など社会一
般に広く公開・発信する情報発信支援事業です。

認定NPO法人

今回は

地星社

<http://chiseisha.org>

地星社 代表理事 布田剛さんにお話を伺いました。

活動内容

地星社は、社会をよりよくする活動を行っている人や組織を支援する中間支援団体で、2013年3月に法人設立されました。事務所所在地は岩沼ですが、支援先があれば地域にかかわらず、石巻や仙台などでも活動しています。「相談・個別支援」と「調査・情報提供」の2つが中心的な事業分野です。



地星社 布田剛さん

「相談・個別支援」の事業分野では、個別相談とプロジェクト支援の2種類の事業を行っています。個別相談は、事業計画づくりや資金調達、団体設立などのテーマでの単発の相談支援です。継続的なかかわりを必要とする場合は、ゴールとなる目標を設定してプロジェクト支援という形で伴走型支援を行います。実際に行ってきたプロジェクトの例としては、石巻地域で移動困難者の支援を行っているNPO法人移動支援Reraの3周年活動報告書の作成支援や、同団体の組織基盤強化の研修などがあります。

「調査・情報提供」の事業分野では、被災地で復興支援活動に取り組む団体を対象に活動状況のヒアリングを行う調査事業と、こうした団体にメルマガ等を通じて助成金や行政の施策などの情報を届ける情報提供事業を行っています。

東日本大震災から5年が過ぎ、復興支援系の助成金も少なくなっていました。震災後にできて、活動資金のほとんどを助成金に頼ってきた多くの団体にとっては、助成金についての情報もまだ必要とされていますが、今後は財政構造を変えていくためのサポートがより重要になってくると考えています。そこで、情報提供や個別相談を通じてこうした支援も行っています。

現在の活動での、注目ポイント

震災後、被災者支援など福祉に関するニーズが高かつたこともあり、地星社でも福祉分野の活動をしている団体を支援するケースが多くありました。こうした必要性から、代表の私も社会福祉士の資格を取得しました。また、地星社では地域福祉にかかわる活動をしていたり、福祉の専門性を持つ役員もいます。このように地域

福祉の分野に強みを持ち、支援先としても地域福祉に重点を置いていることが特徴の一つだと思います。

また、これまでの個別支援に加えて、今後は地域に対するアプローチにも取り組み、地域資源となるような団体を見つけていくことに力を入れたいと考えています。復興支援活動をしている団体は、この5年間、課題は何かということを助成機関などから問われ続け、それで疲弊している様子も感じられます。課題がわかっていても、1年程度の期間で毎年成果を挙げ、課題解決につなげていくというのはそう簡単なことではありません。

課題を解決していくことはもちろん重要ですが、何が足りないか、何ができるないかにばかり焦点を当てるのではなく、地星社ではエンパワーメントの視点を持って、地域や団体の中にあるストレングス（強さ・力）を見つけてそれを引き出し、地域のニーズとつなげていくことを大事にします。そうしたシーズ（課題解決の種）とニーズをつなげる活動から、さらには行政や社協、住民団体、NPOなどの各主体の連携の促進にもつなげていきたいです。

読者のみなさんへのメッセージ

これまでNPOの活動に役立つ情報はたくさん提供していましたが、地星社という団体がどのような考えにもとづいて、どのような活動をしているのかといったことについて、あまり積極的な情報発信をしていませんでした。今後、地星社自身のメッセージをもっと伝えていきたいと考えていますので、ぜひこれからウェブやメルマガ、ニュースレターをご覧ください。地星社の顔が見えるような情報発信を目指していきます。

そして、地域福祉の勉強会や、新たなプロジェクトも始めますので、こうした活動にもぜひご参加いただければと思います。興味や時間の都合に応じてさまざまなかかわりができるよう、参加の機会を活動の中に少しずつ増やしていきます。詳細については、決まり次第ウェブなどでお知らせする予定です。どうぞよろしくお願いいたします。

お問い合わせは

認定NPO法人
地星社

TEL:080-3337-6490

Mail:office@chiseisha.org

URL:<http://chiseisha.org>

(市民ライター 斎藤利直)

サポートご協力 ありがとうございます

■平成27年度会員(敬称略 2016年2月6日~2016年4月10日)

(正会員) 高橋修太様

(準会員) 青少年と障がい者の自立支援センター「とておきの広場」、他1名

■企業・団体協力(敬称略) 富士ゼロックス宮城(株)(カラーコピー機を社会貢献価格にて)

■ご寄付ありがとうございます

5件 610,958円(2016年2月6日~2016年4月10日)

新スタッフ自己紹介

遠藤 誠子

(エンドウ セイコ)

勤務先:本部事務局

2016年4月よりパート職として本務事務局にて、庶務担当致します遠藤誠子と申します。前職では業務の他に会社企画のボランティアに参画する事で社会貢献への大きさを学びました。地域で活動されている方々や組織の方々と関わる事で、自分自身の成長に繋げることが出来ればと思っております。今後も円滑に遂行できるよう努力したいと思いますのでどうぞ宜しくお願い致します。

木村 健

(キムラ タケシ)

勤務先:

仙台市市民活動サポートセンター

はじめまして。3月16日付でせんだい・みやぎNPOセンターへ入職しました木村健です。出身は京都です。昨年3月に福島へ移住し、復興支援関連の職に従事、3月より仙台サポセンでお世話になっております。

京都では15年間運営界に従事し、物流部門の提案営業や管理部門にて営業企画の業務に従事しておりました。

NPOでの活動経験はあまりありませんが、仙台市、宮城県のNPO活動の発展に寄与できるよう取り組みます。よろしくお願いします。

村上 修平

(ムラカミ シュウヘイ)

勤務先:

仙台市市民活動サポートセンター

皆さんこんにちは。2月16日付で仙台SCに入職しました村上修平と申します。

出身は宮城県東松島市で、東北学院大学文学部英文科を卒業しました。

建設関連の仕事や広告関連の仕事に携わってきて、自分の居場所や生きがいを感じるものを探してきました。

中高時代には赤十字活動の経験もあり、人と関わる事や新しい物に触れることが好きです。

SCでの活動や仕事を通じて自分の成長を感じたいと思っています。皆さんよろしくお願いします。

連絡先

特定非営利活動法人 せんだい・みやぎ NPOセンター
〒980-0804 仙台市青葉区大町 2-6-27 岡元ビル 7F
TEL : 022-264-1281 FAX : 022-264-1209
E-mail : minmin@minmin.org HP : <http://www.minmin.org/>

発行:(特活)せんだい・みやぎNPOセンター

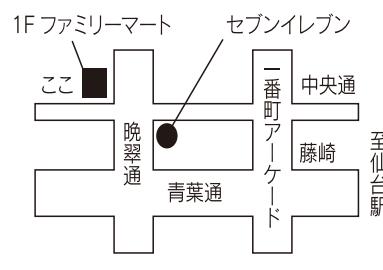
代表理事 大滝精一

編集部:伊藤浩子

田口博徳

発行日:2016年5月1日

デザイン:氏家朗



岡元ビル 7F 仙台駅から徒歩 20~25 分

編 | 集 | 後 | 記 |

当センター、2016年春。

これまで長年組織を支えてきたスタッフ達が卒業した。当センター元代表理事の加藤哲夫さんの逝去、東日本大震災から5年が過ぎ、この間は右往左往しながら壁にぶち当たり続けながら走ってきた。組織の世代交代や改革を進めんとしたがら、運営や事業のマネジメント力の弱さ、当たり前のことを当たり前にを行うことの難しさがあった。春を迎え共に組織を支え、知恵を出し、汗をかいてきたスタッフへ感謝し、本当の意味の「Reborn」、あらたな組織へと脱皮したい。

より動きがわかり易くするためにHPをリニューアルした。このNLみんみんも次号からリニューアルの予定である。お楽しみに。

(伊藤)